



びやくしきびゃっこう
第18号

多様性を認めあう社会





写真提供：東京レインボープライド ©TRP2015

LGBTをはじめとするセクシュアルマイノリティ（性的少数者）が、差別や偏見にさらされることなく、より自分らしく、前向きに生きていくことができる社会の実現を目指して、さまざまな取り組みが世界中でおこなわれています。セクシュアルマイノリティ当事者とその支援者（Ally）が、共に「生」と「性」の多様性を認め合い、あらゆるセクシュアリティ、国籍、職業、年齢等の人たちが理解し合う、そんな寛容で多様性に満ちた社会の創造を目指したメッセージが発信されています。

また、これらの活動では、性の多様性を示す虹のグラデーションがシンボルカラーとして使われています。

人権学習誌『白色白光』びやくへしきやうびやくしつ 第18号 「多様性を認めあう社会」

人ごとから自分ごとへ——身近にある性の多様性 三部倫子……………2

大学とセクシユアルマイノリティ 須賀亮司……………6

〈座談会〉セクシユアルマイノリティを
もっと知ってほしい 尾辻かな子……………10
渡辺めぐみ……………10

共に生きる社会のために 増田優花……………18

自死問題への取り組みからみえてくるもの 野呂 靖……………20

遺族の尊厳と生活の平穩への配慮とは 黒川雅代子……………24

編集を終えて 加藤博史……………28

人ごとから自分ごとへ

—身近にある性の多様性

日本学術振興会特別研究員（PD） 三部 倫子

社会の当たり前の風景

近頃ずいぶんと「LGBT」や「同性婚」という言葉を耳にするようになりました。この手の話題は、みなさんにとってどれぐらい身近なものでしょうか。

本題に入る前に、少し言葉の説明をさせていただきます。新しい現象には新しい言葉を当てはめると付き合ひやすくなるからです。「LGBT」とは、Lesbian、Gay、Bisexual、Transgenderのそれぞれ頭文字をとって合体させた、多様な性を生きる人々を表す総称です。レズビアンとは女性を好きな女性、ゲイは男性を好きな男性、バイセクシュアルは女性も男性も好きになったり、好きになる人の性別があまり重要ではなかったりする人を指します（「パンシエクシュアル」という言葉も好む人もいます）。トランスジェンダーとは、

自分が生まれたときの性別と現在の自分が思う性別が異なり、自分の思う方に生き方を合わせる人のことです。まとめると、LGBTのうち「LGB」は誰を好きになるか、「T」は自分の性別をどう捉えるかを軸に作られた概念といえます。実は性が「普通」とされる人たちにも名前がついており、異性を好きになる人を異性愛者、自分が思う性別と生まれた時の性別に違和がない人はシスジェンダーと呼ばれます。もちろん、人の性のあり様はこの言葉に収まりきるものではありませんし、一人の人生のなかで変化することもあります。LGBTが表す意味を頭に入れて読み進めてください。

LGBTのように性のあり方が典型的ではないとされる人たちは、（分類基準に依ります）1クラスに1人か2人はいるといわれています。この数字は左利きの人と同じぐらい

の割合ですから、さほど珍しいわけでもありません。今になって急に「増えた」のではなく、古今東西、その名づけは異なれど多様な性を生きる人たちは常に存在し続けてきたのです。まずはここをスタートとして確認したいと思います。「そういう人に会ったことがない」と言う人も、これまでの人生のなかで既に出会っていることは間違いありません。街中ですれ違っただけかもしれないし、友達や家族にもいるかもしれません。私たちの生きる社会の当たり前の風景として、いろいろな性を生きる人たちがいるのです。

あなたはどの立場？

本稿を書いている私はこれまでセクシュアルマイノリティの家族研究をし、性の多様性を大学生に教えてきました。受講生は興味深い反応を示し、私にさまざまな気づきを与えてくれます。これを教員の私が一人で独占するのは勿体無い。そこで、これから皆さんと多様な性を一緒に考えるために、次のような仮想のリアクションペーパーを取り上げていきます（内容は私が研究や授業で見聞きしたことを織り交ぜた創作ですが、典型的なものを三つ挙げました）。

平野さん 「私はフツーに異性が好きです。そういう人に会ったことがありません」

佐藤さん「私はセクシュアルマイノリティです」

小林さん「私はシスジェンダーの異性愛者です。LGBTの友達がいいます」

少々おおざっぱな分類をしましたが、みなさんは自分はどれに一番近いですか。

平野さんは、自分は「フツ」で、「そういう人」は自分のまわりにはいないと思っているようです。このように「まわりと違って『普通じゃないかも』と悩んだことがない、むしろ『そういう人』と自分を切り離して自分は『普通』だと思える人は、その社会での「マジョリテイ」といえます。

佐藤さんは、さきほどの平野さんとは逆です。自分が「マイノリティ」だと教員に伝えています。こうして他の人に自分の少数派に属するセクシュアリティを伝える行為を「カミングアウト」といいます。

小林さんも、異性が好きという点では平野さんと同じようです。でも、平野さんが自分を「フツ」と表現する一方で、小林さんは専門用語を使って自分を「シスジェンダーの異性愛者」と表現していますし、身近に「LGBT」の友達がいるようです。

ここまで読んできて、なんだか「アレ?」と思います。そう、この三人は全員私の授業の受講生なのです。同じ教室で毎週顔を

合わせている人たちです。しかし、平野さんは「そういう人に出会ったことがない」と言い切っています。佐藤さんの隣の席に座っていても、です。一方で、平野さんと同じ異性愛者の小林さんにはLGBTの友達がいいます。なぜ同じ授業を受けている学生が、まったく異なる認識を持っているのでしょうか。これからそれぞれの立場の経験を、例をもとに考えてみます。

「私はフツです。そういう人に会ったことはありません」

平野さんのようなタイプの人に、本当にLGBTに会ったことないのかと聞くと、たいてい「マツコ・デラックスやはるな愛とかテレビではよく見るようになったけど、友達にはああいう人はいません」という答えが返ってきます。マツコ・デラックスさんは外見から「ああいう人」だとわかりやすいですが、はるな愛さんが普段着を着ていたら、もしかしたらちよつとわからないかもしれません。勘の良い人はもうお気づきですね。そうです、誰に対して恋愛感情や性的関心を向けるのか（性的指向）といえます）や、その人の心の性別（性自認）といえます）は、一般的には他の人からはすぐにはわからないものなのです。

では、どうして私たちはその人の性が「わ

かる」のか。マツコさんように身体の性別と服装にズレを感じさせる人に出会ったときや、カミングアウトされた時、人は「わかり」ます。もうおわかりですね。平野さんは、外見でわかる人がまわりにはいない、カミングアウトした人がいない（＝されたことがない）ので、「会ったことがない」と実感しているのです。

自分の性を「フツ」と表現する平野さんにとって、性とは「普通」と「普通じゃない」ものの二つに分けられるもののようです。もし、隣にいる佐藤さんがこの発言を聞いたらどう思うでしょうか。「自分は普通じゃないと思われるかもしれない」と、押し黙ってしまうかもしれません。身近な友だちや家族から、「普通じゃない」とみなされるのはこわいことです。さらに、平野さんは目の前に佐藤さんがいるにもかかわらず「会ったことがない」と言っています。「○○は自分のまわりにはいない」の「○○」の部分に、人にはあまりいたくないなあと思う自分の特徴を入れてみてください。「この人に○○と言うのはやめておこう」となりません。

「自分のまわりにはいない」という発言は、自分の目の前から○○に該当する人の存在をなくものとします。平野さんの「セクシュアルマイノリティはいない」という発言は、自分自身とセクシュアルマイノリティとされる

人との間に壁を作り、互いを阻むことにもな
りえるのです。

「私はセクシユアルマイノ リティです」

では、「マイノリティ」側から考えてみま
しょう。佐藤さんのリアクションペーパーに
は「友達に『レズとかホモとかまわりにいな
い』と面と向かって言われました。親友なの
でカミングアウトしようと思っていたけれど、
絶対に言えないです」と続きがありました。
佐藤さんは友達の「レズ」「ホモ」という
言葉を聞いて、どうやらひるんだようです。



「ホモ」「レズ」「オカマ」「ニューハーフ」な
どの言葉は「普通とはちよつと違う」性を面
白可笑しくからかったり、馬鹿にしたりする
ときに使われてきました。言葉そのものにネ
ガティブな意味がくつついていきますので、佐
藤さんは自分も「そうだ」と言えなかったの
かもしれません。

私がこのように説明すると、佐藤さんの方
が気にし過ぎなんじゃないかと感じる人もい
るかもしれません、言っている側は傷つける
つもりで言っていないはずだ、と。ここでみな
さんに知っておいてほしいのは、セクシユア
ルマイノリティのなかには、「まわりとは違

う」と気づいたときから、性的指向や性自認
を隠して生きる人は少なくないということで
す。カミングアウトがうまくいく人もいれば、
残念ながら学校でいじめられたり、仕事を続
けられなくなったりする人もいます。簡単に
カミングアウトしないのは、自分を傷から守
るためなのです。隠さないでいる人もいれば、
カミングアウトしない状態が数年で終わる人
ずーっと何十年も異性愛者のふりをして生活
している人もいます。友達や家族に対しても、
伝えない人もいます。

しかし、自分を装う生活は疲れるものです。
自分が好きな人や「生涯の伴侶」と思えるよ
うな人を友達や家族に紹介しな（できな）か
つたり、「男」と「女」に当てはまらない自
分を隠し続けたりするのは大変な労力を伴
います。だからこそ、かれらは「この人には
言っても大丈夫かどうか」と人をよく観察し、
可能な人にはカミングアウトし、その人とは
無理をしなくてもよい人間関係をつくらうと
するのです。

カミングアウトをされて「俺を好きになる
なよ」と反応する人もいるようですが、異性
を好きな人が異性全てを恋愛対象とするわけ
ではないように、同性を好きな人も同性であ
れば誰でも、なはずがありません。カミング
アウトと恋愛感情の告白は違うということを
知ってください。

「私はシスジェンダーの異性愛者ですが、LGBTの友達がいいます」

平野さんとは異なり、小林さんは友達からカミングアウトされたことがあるようです。私はこのようにカミングアウトされた学生からの相談にも乗ってきました。例えば「友達にカミングアウトされたけれど、その後どのように付き合っていかわからない。傷つけない」といったものです。

最近はその手の情報に触れる機会が増えたとはいえ、LGBTについて学校で習った人は少数派でしょうし、家庭でもあまり話題になることではありません。ですから、少しの戸惑いは仕方がないかもしれません。ただ、これだけは心に留めてください。カミングアウトには、「あなたの前では嘘をつきたくない。あなたとはいい関係を築いていきたい」というポジティブなメッセージが込められている、ということをです。カミングアウトされるということは、その人から信頼されている証といえます。カミングアウトされた後、傷つけるのを恐れて距離を置いてしまうのではなく、「あなたのことを知りたい、面倒かもしれないけどあなたのことを教えてくれる？」と伝えてはどうでしょうか。

身近なLGBTのために行動する人は、近

年「アライさん」(alliance、同盟者)と呼ばれるようになっていきます。アライさんは友達や家族のために、適切な言葉を選びます。同性が好きな人を「ホモ」「レズ」と蔑称で指さない、異性が好きな人を「フツ」とみなさない小林さんのような姿勢は、LGBTだと自覚しているまわりの人に安心感をもたらすと同時に、いろいろな人と友達になる機会を小林さん自身にもたらしめています。

性の多様性を理解するのは、自分とは違う「マイノリティ」を理解して「あげる」ことではありません。それは自分とは異なる人とながり、自分自身の人生をより豊かにする学びなのです。

性の多様性と人権

みなさんは好きな人に振られたとき、生きていられないほど悲しくて寂しい気持ちになったことはありませんか。「男／女のくせに」と言われて、なんだかみじめな気持ちになったことはありませんか。誰を好きになるのか、自分の性別をどう捉え・表現するかは、私たちの人格のとても大切な部分を形成しています。同性を好きになること、自分にとってしっくりとくる性別で生きること、病気でもおかしいことでもなく、ましてや「治す」ものなどではありません。他の人がその人の大切な部分が無傷に取り出したり、変えたりす

ることはできないのです。

みなさんが大切にされる社会とは、私たちが生まれ持った人権が大切にされている社会です。「世界人権宣言」には「すべての人間は、生まれながらにして尊厳と権利とについて平等である」とうたわれています。すなわち、誰を好きであっても、自分の性別をどう思っても、その人自身は生まれた時からとても大切な人だということが意味されています。

私たちは性に対して、「エロイ」か「恥ずかしい」、もしくは、「普通」か「普通ではない」という両極端の思考回路を経由するのに慣れてしまっています。行き着く先には、どんな性が「普通」なのかをめぐる優劣が待ち構えています。差別や偏見は人が作り出さものです。だからこそ、私たちは自ら思考の仕方を変えることで、よりよい性を生きられるはずです。

※

本稿を最後まで読んでくださった方には、多様な人々が身近に生きているという事実、そして、最も身近な自分の性でさえも変容しうる可能性がある、この二つの言葉を送りたいと思います。大学生という若い皆さん、そして、かれらとともに歩む教員・職員の方、ひとりひとりの行動が社会をよりよいものすると私は信じています。

大学とセクシユアルマイノリティ

社会学部実習助手 須賀亮司

セクシユアルマイノリティの問題とは

セクシユアルマイノリティは皆が同じ目的を持つて集まったカテゴリーというよりは、異性愛を軸にした「その他」という意味合いが強いです。そのため、お互いの求めているものには多少なり違いが存在します。私はゲイセクシユアルなのですが、セクシユアルマイノリティという言葉を使う時には、どうしても慎重にならざるを得ませんし、セクシユアルマイノリティの代表を気取ることも出来ません。他のセクシユアルマイノリティの方とお話する度に、お互いの状況や求めているものの細かな違いを感じることもあります。同じ同性愛者であったとしても、レズビアンとゲイの置かれている状況は異なりますし、ゲイ同士であっても、都市と地方、国に

よっても、求めているものや苦しみに違いがあるように感じます。

2人の例を挙げてみます。ゲイのAさんは、パートナーと同居しており、職場にも理解ある人たちがいます。本人も現状の生活に不満を感じていません。同じくゲイで地方に住んでいるBさんは、家業を継ぐように迫られ、将来的には親の介護をするよう言われており、パートナーと一緒に暮らす事を諦めています。極端な例を挙げたように見えるかもしれませんが、割とある事例です。

Aさんは自分以外の理解者がいるという点がとても大きいです。逆に、Bさんの孤立が目立ちます。親に一か八か話してみるというのも手ですが、好意的に受け入れてくれるかは分かりません。相手がセクシユアルマイノリティに対してどのように思っているのか、現状では意思確認をする手立てがないからで

す。その点、セクシユアルマイノリティという集合は、『確認しなくてもお互いを同志として認めあうことの出来る場所』であり、『相手を気にせずホンネを語れる場所』という意味で、普通の人間関係とは異なり、当事者に価値のある場所になっています。

大学とセクシユアルマイノリティ

最近ではインターネット上のサービスを利用し、自分以外の当事者と交流することが出来ます。元々匿名性の高いインターネット上のコンテンツは、当事者にとって利用しやすいコンテンツであったため、その黎明期から掲示板やチャット、個人のホームページを介して他の人たちとの交流を目指す人たちが多くいました。

しかし、今も昔もこうしたインターネット上のサービスを利用することに抵抗のある当事者もいます。匿名性であるが故のトラブルも決してない訳ではありません。そうした状況の中で、最近では大学が交友のきっかけとなるケースが増えてきました。多くはその大学の学生たちが中心となり、学内のセクシユアルマイノリティ同士の繋がりを支援する、通称「セクマイサークル」と呼ばれているものです。中には他大学の学生を受け入れている大所帯な所もあります。

一方、絶対数は少ないのですが、大学が率

先してセクシユアルマイノリティに対する人権啓発活動を企画し、学内サークルとも連携してイベントを起こしている所もあります。関学では、人権教育研究室という場所が中心となり、学生と大学側が連動しながら啓発活動をしています。こうした活動を行うことの最大のメリットですが、大学側のセクシユアルマイノリティへの姿勢が学生たちにも伝わり、そうした環境で苦しんでいる学生も、「大学側にも分かってくれる人がいるんだ」という安心感が生まれることで、現状の苦しみを訴えやすくなります。もちろん、大学に訴えてなんとかするとは限りませんが、そこにセクマイサークルという逃げ場があれば、彼らが新しい人間関係の中で学生生活を立て直せる足掛かりができるのです。

なぜ大学？

そもそも、なぜ大学なのでしょう？

高校時代までは学校のクラスや家庭、部活動の仲間など、固定的な人間関係の中でずっと過ごし続けなければなりません。セクシユアルマイノリティにとっては環境や状況が生活に大きな影響を与えているのですが、高校時代までの人間関係というものは、学校のクラスや家庭、部活動など、比較的固定的で、「決められた人たちと同じ箱の中で長く生活をする」ような状態です。そういった場合、今後

の事を考えると、以降の人間関係をこじらせるような行為は絶対出来ません。自分がセクシユアルマイノリティであるとばれてしまうなど、もつてのほかです。僕も高校時代に「もしかしてゲイなんじゃないの？」と同級生に言われた時、「バカ野郎！ そんな訳ないだろ！ 気持ち悪い！」と、異性愛者のフリをしていたことがあるのですが、今後の事を考えればどうしてもそうならざるを得ませんでした。

他方で、大学生になると人間関係に広がり生まれ、活動範囲も大きく広がります。高校時代までの人間関係に加え、ゼミでの人間関係、授業ごとの知り合い、アルバイト先での知人など、とりわけ同級生との〈共同生活〉を送ってきた高校までの印象とはがらりと生活が変わってきます。また、就職活動を迎えるにあたり、これから自分はどういった人生を送っていききたいのかという具体的なイメージが出てくる年代でもあります。

自分の体験を思い返すと、就職先ではセクシユアリティを伝えて仕事をしたいと考えていましたが、セクシユアルマイノリティの先輩から、「ゲイフレンドリーな企業もあるよ」というお話を聞くまで、そういう企業があることさえ知りませんでした。こうした情報は就職活動の幅を広げてくれる反面、キャリア相談などに言っても得られることのない、独

自の情報です。サークルがあるという事は、そういった情報が上級生から下級生へと伝わっていく訳ですから、こうした意味でも、当事者同士が最新の情報を共有し合える場としても機能しています。つまり、大学でセクマイサークルが広がっている理由には、当事者同士の情報の共有や、異性愛者のフリをしている時の人間関係に疲れた時の癒しの場という意味があります。もちろん、自分のパートナーを探す場所という意味も、当然ありますし、彼らにとって、安心して恋について考えられる初めての機会になるでしょうから、そうした側面でももちろん大事な活動になるのではないかなと思います。

龍谷大学でも

実は龍谷大学にも「S×LGBTQ（通称SL）」というセクマイサークルがあります。私と1つ学年が上の先輩が発起人となり、2008年に結成したサークルです。現状、サークルは維持されています。その理由も後から説明するとして、まずはどういったサークルであったのかご説明します。

メインの活動は週1日、集まる機会を設けて皆でお菓子やジュースを持ち寄り、興味のある話題について話をするというものです。その後、代を譲る中で、他大学と共同でイベントに参加したり、授業でセクシユアルマイ



S×LGBTQ用に作成した当時のバナー

Sには「セクシュアリティ」や「サポート」、「サロン」等の意味があった

ノリティについてお話をしてみたり、飲み会や交流会を企画するなど、厚みのある活動に変わっていきました。参加人数は多い時は10名程度、定期的に来てくれる人は5名程度でした。私が広報に行脚していたのは福祉系の授業だけだったので、体感的には多いと感じていましたが、他の大学のセクマイサークルと比較すれば少ない印象があります。

活動は残念ながら2011年には終了しました。理由は広報のむずかしさです。主に授業で広報をしていたのですが、セクシュアルマイノリティの活動である以上、学生の前で募集をかけるには難しいテーマでした。私は当時院生であり、研究テーマにもしていたので、特に抵抗なく話すことができましたが、後輩たちは皆、学部生でしたから、そうした意味でも難しかったのではないのでしょうか。2011年には公認サークル化を行い、ポスター等でも募集をかけました。その時には既にサークル維持が困難な状態になっており、当時の代表に負担をかけることになってしまっていました。最終的にはサークルを閉じるよう、アドバイスするに至ったのです。

関学のように、大学とセクマイサークルがうまく連携できれば、また違った展開も待っていたのかもしれない。ただし、恐らくそうした活動をするにあたっても、熱意ある学生の存在、人の問題も必要になります。

学生の気持ち

では学生はどう思っているのでしょうか。この文章を依頼されてからずっと考えていたのですが、私は全てを把握している訳ではないので、一概には言えません。中には自分の環境に息苦しさを感じ、苦しんでいる人もいます。一方で、SNSでの出会いに

満足しているので大学でわざわざ会いたいという風には思っていない人もいます。本当に色々な意見があると思うのです。そして、本当に苦しんでいる人というのは、きっと私の所にアクセスすることすら出来ないのではないかなと思います。

ただし、こんな事例がありました。自分は男性同性愛者であり、今まで自分は苦しんできました。この苦しみについて話したいし、他の人とも出会ってみたいという要望があったのです。いざ彼に会って話してみると、自分の中で何を話していいのかわからなくなってしまうというケースです。苦しいと感じているのに、整理して話そうと思うとうまく苦しみを伝えられないのです。また、別の学生からは、周囲にカミングアウトしてしまったせいで、何が問題なのか分からなくなってしまったというケースもありました。

こうした事例は何も特別ではありません。ただ、どちらも「これから」という視点は少ない印象があります。将来的な課題を考えられないセクシュアルマイノリティは多くいますが、そもそも今はよくても今後どうなるのかなんて、誰にも想像がつかない話ではあります。

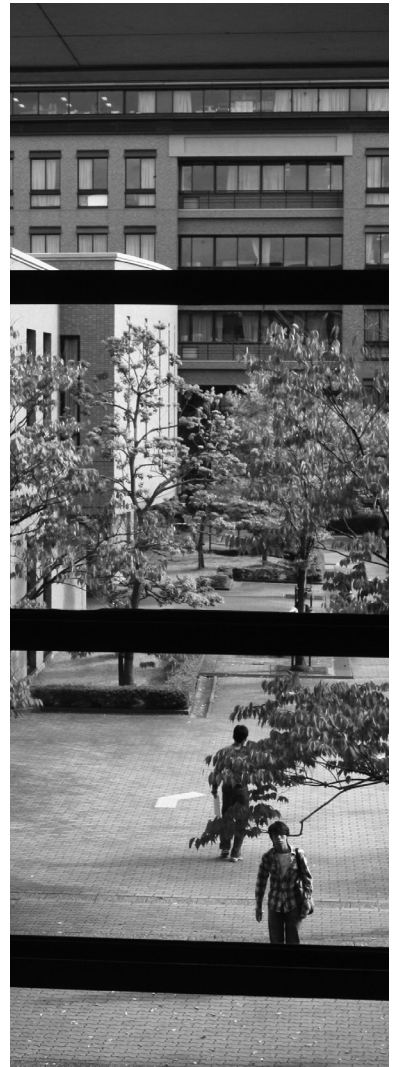
相談に来た彼もきつと、その都度その都度、辛い経験をしても、そうした自分の苦しみを落着いて噛み砕ける機会が少なかったのだ

はないでしょうか。言葉にできるほど、自分の中の気持ちをはっきりしていなかったのかもしれませんが。もしかすると、初めて出会った自分以外の同性愛者の人が太ったおっさんで、がっかりして何も言葉が出てこなかったのかもしれませんがね。そこはもう弁明のしようがないですが。

いずれにせよ、セクマイサークルのように、セクシユアルマイノリティの当事者が集まるということは、落ち着いて色々なことを考える余裕を与えてくれます。誰かに話すという機会があるということは、きつと伝え方や考え方にも影響してくるはずです。学生の気持ちというのは、きつとそういう場所があつてはじめて語れるものであつて、私の身勝手な妄想をここで語ることは出来ないかと、改めて思う次第です。むしろ、そうした学生が語れる場所をうまく大学側で用意できないものかなあと思うのが、私の本音です。

セクシユアルマイノリティの学生のためにできること

とはいえ、こんなまとめではよくないでしょう。少なくとも苦しんでいる人たちはいるのですから。かといって、大学側がセクシユアルマイノリティの人たちに「来てください！」と言ってみたところで、恐らく彼らは集まらないでしょう。



セクシユアルマイノリティであるということとは、常に問題になるとは限りませんが、もっと適切に言うと、「必要な時に、必要なだけ、必要な人に」、知って欲しいのです。私は3

回生の時にゼミの女の子にカミングアウトしましたが、その後、彼女は飲み会や他の人の会話の中で、僕が異性愛者扱いされている時に、ことあるごとに「大丈夫？」と声をかけてくれました。そういう人が一人でも身近にいると、全く状況の受け取り方は変わってくることを知っています。これは正に私の中で「必要な時、必要なだけ、必要な人」という条件が揃った時だったのです。全ての人に理解されるというのは難しいですから。

ただ、こんな事を言つて嫌われないかどうかとか、色々考えました。話した後はすごく声も震えていました。相手に伝えることで、それまでの人間関係が壊れてしまうのではな

いかという恐怖がありました。なので、大学側がセクシユアルマイノリティに対して理解者であるという姿勢を見せることは、やはり大事な気がします。

ただし、学生同士では話は別です。例えば同性愛者を差別しないという意思表示をするバッジでも作ろうものなら、それを付けているだけで「あいつはホモなんじゃないか」というような事を裏で言われるかもしれません。私が高校時代に「気持ち悪い」と同性愛について語ったように、「否定的な姿勢を見せ続けなければならぬ」という空気があるうちは難しいでしょう。こうしたまずは空気を変えていくため、授業や講演などを通してセクシユアルマイノリティについて考えてもらう機会が今後増えていくことを切に願っています。

座談会

尾辻かな子

LGBT政策情報センター代表理事・前参議院議員

セクシュアル
マイノリティを
もっと知ってほしい

渡辺めぐみ

社会学部准教授



阪神淡路大震災を契機に

渡辺 「セクシアルマイノリティをもっと

知ってほしい」というタイトルで、尾辻さんにいろいろとお話を伺いたいと思います。尾辻さんは、LGBT政策情報センター代表理事でいらっしゃいます。セクシアルマイノリティとひとくちにいつても多様ですが、とくにLGBTといった場合、L（レズビアン）、G（ゲイ）、B（バイセクシアル）、T（トランスジェンダー）のことをさしますね。比較的、日本でよく知られているのがトランスジェンダーであるように思います。トランスジェンダーは、身体の性別と、自分が認識している性別が一致していない状態です。日本では、ドラマでとりあげられたことによって、知られるようになったのではないのでしょうか。例えば、身体は女性、戸籍上も女性であるけれども、女性の制服を着ることや、女性として生きることと違和感があったり苦痛を感じたりするという状態ですね。実際には、トランスジェンダーにもさまざまな人たちがいて、性別がいまいであったり、決められないといったりという人もいます。このような単純な説明では不十分なのですが……。一方、レズビアン、ゲイ、バイセクシアルについては、一見、知っているようでいて、誤解も

多くあるように思います。私の定義では、レズビアン・ゲイは、同性愛者ともいわれ、自分の恋人・パートナーを、同性の中から選ぶ人といったらよいでしょうか。バイセクシアルは、恋人・パートナーは、同性から選ぶこともあるし、異性から選ぶこともあるという人、ということだと思います。さて、尾辻さんは、公職者（選挙で選ばれる議員など）としては、日本で初めて、同性愛者、レズビアンであることをカミングアウトされました。ですから今日は、セクシアルマイノリティのなかでも、とくに同性愛者を中心としたお話をしたいと思っています。

さて、尾辻さんと私は、同じ年ですよ。

尾辻 そうですね。

渡辺 私は大学院に入った1997年、22歳のときにジェンダーの勉強をするなかで、セクシアルマイノリティの問題についてはじめて知りました。それまで全く知識もなく、深く考えたこともないのに、すでに私の中に差別意識が内在していたことに、はじめて気がつきました。

尾辻 そうなんです。

渡辺 以来、いろいろと勉強していく中で、とくに私の専門の家族社会学をやっていくと、セクシアルマイノリティの問題が非常に重要だと気がつきました。今は大学での授業の中で、セクシアルマイノリティと家族

の問題を教えています。

そんな中で尾辻さんとお会いしたのは、あるシンポジウムのあとの懇親会の席でしたね。そして2011年に龍谷大学へおこしいただいて、お話ししていただくようになりました。さて、このような機会ですので、せっかくですから、尾辻さんがこれまでどんな経験をされてきたのかを、自己紹介もかねて、お聞きしたいと思います。

尾辻 私も渡辺先生と同じ、団塊ジュニアですよ。去年、ダブル成人式になってしまった（笑）。私は一般社団法人のLGBT政策情報センターを立ち上げて今、代表理事として、セクシアルマイノリティの人権、政策について、講演会などで語っていますが、最初から人前で語っていたわけではありません。私は女性の同性愛者、レズビアンですが、そういう自分を受け入れるのは、すごく難しいことでした。テレビドラマや映画をみても、異性愛があたりまえで、異性愛でないのはおかしいという中で生きてきたので、そういう価値観が私の中にも内在化しているんですね。

渡辺 幼いころから女の子は、「王子様と結ばれる」というハッピーエンドの童話ばかり聞かれますしね。

尾辻 友人たちが楽しくそうに恋愛の話をしますが、私はまったくついていけません。そのときに疑問に思ったのは、なぜ私

は異性である男性とつき合うことが、まったく楽しくないのだからということでした。でも、誰にも相談できません。その時に、もしかしたら自分は、同性と一緒にいるほうが楽しいのかなと思ったのです。

そのころはまだインターネットも普及していなかったので、自分が何者なのかを確かめる術もなかったし、自分を確かめることが怖かった。自分を認めると、人生に恐ろしいことが起こるのじゃないかと、自分の気持ちにふたをしたままでした。1993年、私が18歳のときです。

渡辺 それは大学のときですか。

尾辻 ええ。都会の大学ではなかったのですが、この地域にいたら何も情報が入らない気がし



尾辻かな子さん

て、都会に行こうと直感的に思いました。もちろん両親には別の理由を言って、実家の神戸に戻りました。そのとき、阪神淡路大震災に見舞われたのです。当時は1月15日が成人の日でした。

渡辺 15日が成人式で、翌々日に大震災が。

尾辻 そのとき私はアルバイトをしていましたが、アルバイトさきも私が通った高校も、地震でつぶれました。明け方の5時に発生しましたが、もし日中にアルバイトをしている時間帯だったら、私も命を落としていたでしょう。そして、人生ってどのように終わるのか、本当にわからないものだと感じました。人生の最後の時を迎えた時に、自分の人生を振り返り、自分に嘘をついて生きてきたと振り返りたくないと思いました。

渡辺 そうなんですか。私は阪神淡路大震災の時に大学生として東京にいましたので、軽々しく何か言うことはできないんです。ただ、震災を経験されたかたからは、震災が人生に大きな影響を与えたというお話をよく聞かいますね……。

尾辻 そこから本当の自分と向き合おうと。そして違う大学に行き直し、そのとき入ったサークルの女性に恋愛感情を抱いて、そういう自分を否定することができず、自分と向き合うことになりました。自分自身へのカミングアウトに18歳から5年くらいかかりました

ね。

渡辺 長い時間、ご自身と向き合われてきたのですね。

尾辻 当時、ようやくインターネットが普及しだして、大学の情報処理室の片隅で、誰にも見られないようにモニターを反対側に向け、もし誰かにみられたら、すぐ画面を変えられるように、同性愛という言葉を検索しました。

そこで、レズビアン・バイセクシュアル女性の集まりがあると知り出かけていって、同じような思いを持っている人たちと出会えたことで、はじめて自分のことが話せるようになりました。

渡辺 インターネットが今ほど発達していない時代ですから、大学からアクセスするほかには、情報を得る手段がなかったでしょうね。マイノリティにとって、身近に共感して語りあえる人を見つけるのは難しいですから、情報にアクセスできるかということは、とても大切ですね。他のセクシュアルマイノリティと出会えたのが23歳のときですか。

尾辻 そうです。やっと自分の感情をしゃべることができるようになり、それからジェンダーとかセクシュアリティということを学びはじめました。

行き直した大学が京都にあったので、京都の大学コンソーシアムによっていろんな大学のジェンダー論を学べた。このことも、自分

自身を受け入れる大きなきっかけとなりました。

ただ結局、私は二重生活をしていたのですね。たとえばバーやクラブの中とかの限られた空間の中でのみ、自分の本当の姿を見せていて、そこから一步出ると同性愛者であることを隠すという二重生活です。

なぜ私たちは自分自身のことを隠さなければいけないのか、自分のセクシュアリティに悩んだり受容できなかったりするのかわかるとき、自分たちの存在が問題ではなくて、同性愛者を気持ち悪くおかしな人たちだと思っている社会の人たちの目が、いちばん問題なのだと気付いたのです。だったら自分がこの社会の何をどう変えられるのか、どうにかしてこの社会を変えてみたいと、大学生のとき、議員インターシップに応募しようと思うように……。

渡辺 尾辻さんの今のお話の中で、ちょっと乱暴な言い方ではあるのですが、重要だと思える内容がありました。大切なのは、セクシュアリティとは、人生とか生活ということなんだと。つまり、その人がどのように生きていきたいかということです。

尾辻 ええ。

渡辺 もちろん、誰かを好きになる、ということ、人生のすべてではないし、同性愛者であるということは、ある意味では、その人

の一つの側面だと思います。ただ、恋人・パートナーが同性だということです。それなのに、同性愛者という一点をとらえて差別され、学校でいじめられるとか、職を失う危険がある社会はおかしいです。そのために自分を偽らなければならないとなると、本当の自分の人生を生きることができない。誰もが自分らしく、ありのままに生きられる、これは基本的人権の問題ですね。

尾辻 そうです。

同性パートナーシップの法律がない日本

渡辺 セクシュアルマイノリティの問題を、なぜ語らなきゃいけないのかを考えると、その人の生き方というものですよね。

尾辻 同性愛者と同性愛者ではすごく差があって、たとえば大学に入って誰かを好きになつてつき合うといったとき、異性愛の人は隠さなくていいし、人前で手をつなぐことも許されている。でも同性愛者の人が手をつなぎたいと思っても、手をつないだその瞬間から白い目で見られる。こういう人たちもいるよね、というふうにはならない。

渡辺 たしかにそうです。

尾辻 まったく一緒、平等ではない状況があります。日本には同性パートナーシップ法な

どはありませんが、アメリカでは昨年、同性婚というか結婚の平等が全米の州で認められるようになりました。ではこの同性パートナーの法的保障がないと、何が困るのか、です。それはたとえば病老死の問題です。お互いの関係を秘密にしておくと、相手が入院した時に病室に入れてもらえなかったり、パートナーが亡くなっても財産を相続できないとか、さまざまな不具合があつて、それは政治的課題だと気付くようになりました。

私、先日、朝日新聞を開けてびっくりしたことがあります。18歳から選挙権が認められるようになり、AKB48の3人のメンバーが、憲法学者の木村草太さんと政治の仕組みを学ぶシリーズなんです。が、「同性同士の愛、なぜ切ない歌に？」と記事になっていました。

私が2005年にカミングアウトしたときというのは、マスコミも取り上げるのに躊躇したり、なぜカミングアウトしなければいけないかということについての理解も、得られにくい時代でした。それが11年たった今年の1月の新聞では政治の課題として大きく取り上げられている。平等ではないということが、どうということなのか、それは実は法律で変えられるということが、知られるようになりました。

渡辺 つまり、誰と一緒に生きていきたいの

かという生涯のパートナーを選ぶときに、なぜ異性でなければならぬのか、同性同士で何がいけないのかと質問を投げかけると、「勝手に暮らしているぶんには何も問題ない、私は差別なんかしていないし、そういうカップルがあっても、とくに何か法律のようなものは必要だとは思わない。何でそんな勉強をしなきゃいけないの」——10年前、学校でセクシュアルマイノリティの話をすると、そういう答えが返ってきました。

尾辻さんがさきほどおっしゃったように、パートナーが病気になったときや亡くなったときの問題ですね。病院で手術するとき家族でなければ説明を受けられなかったり、長年一緒に暮らしていたとしても、最期を看取



渡辺めぐみさん

ることもできないかもしれない。いろんな問題が起こります。とくに、震災のときには、個人情報や壁の問題になります。法律上の「家族」でなければ安否を確かめることすらできません。こうして考えると実は「家族」という関係は法律的に強い結びつきです。私たちは生まれてくるとき、親を含めて家族を選ぶことはできません。しかし、結婚というのは、「他人」をひとり選んで家族にすることです。誰しも、新たな家族をつくる権利が与えられているということです。しかし現在、結婚相手は異性から選ばなければならないことになっています。でも、新たな家族はなぜ異性でないとつくれないのか。成人同士が家族になるうと合意したのに、それが同性同士だからといって認めないのはおかしいと。家族社会学者としてずっとそういう疑問があったわけです。

尾辻 その通りだと思います。おそらく2015年がひとつのターニングポイントになるかなと思っています。

日本でも東京都の渋谷区や世田谷区、宝塚市、那覇市など自治体が動きました。渋谷区では「男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」が区議会でも可決され、パートナーシップ証明書が交付されるようになります。世田谷区も同性カップルに宣誓書の受領書を発行しています。自治体の動きに背中

を押されるように、国会でも立法が議論されるようになってきたと思います。

渡辺 法整備を進めていくためには、やはり、マジョリティがこの問題について知ることが必要ですね。

尾辻 私は渡辺先生の授業のときにしゃべらせてもらって、あとで感想をいただくときに、やっぱり変わってきたと思うのが、自分のまわりにそういう人がいるということを書いてくれる学生さんが、非常に増えてきました。LGBT（レズビアン・ゲイ・バイセクシャル・トランスジェンダー）のマイノリティの数は3%から7%、左利きの人と同じくらいだと言われていますから、自分の身近な友達だったり、高校のクラスメイトだったり、そういうようにまったく知らない誰かじゃなくなってきました。

変わりはじめると早い

渡辺 私もこの問題と出会って20年ちかくなり、教えるようになって10年。たしかに急激に変わってきましたね。最近の若い人で、カミングアウトする人が増えてきました。しかし、これでじゅうぶんかと言うと、そうではありません。たとえば、私は教員免許更新講習で、学校の先生方を対象に、学校教育の中でセクシュアルマイノリティの子どもとど

う向き合うかというテーマで講義をしています。私より年上のかたにお話すると、セクシュアルマイノリティという言葉すら知らない人が多い。あるかたから匿名でご感想をいただいたことがあります。じつは自分はセクシュアルマイノリティだ、自分が子どものころ、学校でそういう授業をしてくださる先生がおられたら救われたのに、という声です。でも、講義を通じて、学校の先生方は、セクシュアルマイノリティの問題について知ることができてよかった、とおっしゃってくださいますね。学校教育のなかで、セクシュアルマイノリティの子どもたちにポジティブなメッセージを送ることは大きな効果があると思っています。子どものころから、意味もよくわからず、「レズ」とか「ホモ」「オカマ」といつて笑うことが日常的に行われていますが、そういう言葉は蔑称だから使ってはいけない、と伝えることが必要ですね。そして、マジョリティと違って、どの子も自己を肯定して生きていけるよう、教育現場はがんばらなければなりません。

尾辻 教育がこの課題に取り組むことは非常に重要です。去年、イギリスに行ったのですが、イギリスでも同性婚が認められています。今、日本でレスビアンをカミングアウトした議員は私ひとりですが、イギリスではLGBTの国会議員が5%になりました。国会議員

の中にも当事者が当たり前にいる国に行くと、カミングアウトはじつにさらかとしたものです。たぶんこれから今の10代の世代の皆さんは、自分のセクシュアリティを隠さず、オープンに生きる人が増えると思います。その分、友達にカミングアウトされることも多く経験することになります。友達にカミングアウトされたら、そのことをちゃんと受けとめるということが大事です。何か困っていることはないかとたずね、一緒に考えていくとか、できればその子の恋愛相談にのってあげるような友達になつてほしいなと思います。自分の本当のことを知ってもらって友達になりたいということなので、信頼されているんだなと受けとめてほしい。もし自分に付き合つてと告白されたとき、断つたら心に傷をつけるんじゃないかと思うかもしれませんが、それは男女の恋愛も同じなので、断ることがいけないことはありません。

渡辺 やはり自分は何者かということを知ってほしいというのが、カミングアウトの意味だと思いますが、今の日本はそういうことに関して過渡期にありますね。

尾辻 たしかにそうです。大学時代に友達にカミングアウトしたら、その友達はショックで一晩眠れなかったそうです。カミングアウトして驚かす気はなかったただけだね。でも自分の周囲にそういう人がいることを知る

ことで、社会人になってゲイの友達ができたとかで、その人自身も世界が広がっていきました。人間関係がすごく多様になるきっかけが作れる。

渡辺 やっぱ二重生活ではなく、本当の自分として友達と話し合いたいし、嘘のない人間関係を築いて仲よくなりたい。その人になら本当のことを話してもだいじょうぶだろうという気持ちで、思いきってカミングアウトしてくれた。その気持ちを受けとめて、そのことについて話し合おうということです。そして友達関係が深まっていく。

尾辻 カミングアウトを誰にと考えたとき、家族には言えないし。学校の先生にも言えない。やっぱり友達ですね。

渡辺 尾辻さんが男性が多い政治家の世界でカミングアウトされたのは、すごいことです。当時、学生でも友達にカミングアウトできる時代ではなかったのではないかと思います。すがいかですか。

尾辻 私自身は学生時代、ゼミの友達にカミングアウトしていましたが、親にも言っていました。2005年、議員としてカムアウトして、新聞にのったり、本（『カミングアウト〜自分らしさを見つめる旅』講談社）を出したりで、どういう反応が返ってくるか、暴力にあったりするのじゃないかと、怖い部分がありましたね。でも感謝のメールをいっぱい



もらいました。言わないと可視化できない問題、見えない人たちの見えない問題を見える存在にすることで、カミングアウトしてくれてありがとうという感謝とはげましのメールが、何百通も私に届きました。

そのとき、テレビ番組が街の人にアンケートをとったのですが、いちばん多い答えが「いいんじゃないですか」でした。でも、それは、自分の家族でなかったらという前提ですね。身内のことになれば自分の子であれば受け入れるけれど、外には言ってくれるなど、内と外の使い分けを感じました。

渡辺 でも変わりはじめると、日本はとても早い。

尾辻 安室奈美恵さんが「できちゃった婚」

をしましたね。それまで結婚する前に妊娠するというのは倫理的にいかがなものかという風潮が強かったのですが、今は妊娠することで結婚する「できちゃった婚」の人たちが増えています。もうそんなに隠さなきゃいけないことではなくなった。名称も「おめでた婚」になりました。すごい変わりがたの早さですよ。

私の仮説ですが、アメリカでは2004年に全米の州の中でマサチューセッツ州に初めて同性婚を認める法律ができ、2015年にはすべての州で認められるようになりました。たった11年で達成したのです。そういう例を考えると、ここ10年で日本も大きく変わっていくように思えます。

渡辺 ぜひそうやってほしいです。ただ日本は家族の壁というか、建前が強いところがありますので。以前このような話を聞いたことがあります。記憶を頼りにした大雑把な話ですが、アメリカのある女子大の授業で、「家族や友人に、自分がレズビアンであるというウソのカミングアウトをして、そのまま一週間訂正しないでいられるか」という実験をしたそうです。学生たちは、「私も、家族も、友人も、レズビアン差別などしない」と考えていたでしょう。しかし彼女たちが「自分はレズビアンだ」とウソの宣言をして当事者の立場に立って見たら、さまざまな差別を経

験し、一週間も実験を継続することはできなかった。「レズビアンだとカミングアウトしたのはウソだ」と言わざるを得なかったわけです。よく「日本は同性愛に寛容だ」という人がいますが、果たしてこんな実験をしたらどうなるでしょうか。私の授業ではとてもこんな実験をしようなどとは言えません。そもそも私自身、こんな実験に参加できる気すらしません。

そう考えると、アメリカでは受け入れられても、日本にはまだまだ高い壁があります。これからどうやって生きていくかというモデルもないし、カミングアウトするにしてもそのお手本が少ない。それが今後の課題かなと思っています。

誰もが自分らしく

尾辻 でも、ちょっと他の人と違った特性をもっているマイノリティだから、隠さないと生きていけない社会というのは、非常に生きづらい社会です。人には自分と違うように見える人や、自分とは違う物の見方を排除したいという気持ちがありますが、ではどうして自分と違うというだけで怖いと思ってしまうのか、その原因はどこにあるのかを、自分の中で考えてほしい。知らないことが原因であることも多いです。

共に生きる社会のために

国際学部国際文化学科1年生 増田 優花

《共に生きる》とは何だろう

私は電動車を使っています。自分一人では上手くできないことも多く、たくさんの人に支えられながら生活しています。しかし、人とは違うという点からすれ違いが生じ、残念な思いや時にはつらい思いも経験してきました。一方で、だからこそ気付けたことやいただいた優しさも数多くあります。

子どもやお年寄り、ハンディを持った人や外国人など、今私たちは多様な人々が生活する《日常》を生きています。しかし最近、いじめや人間関係のトラブルが原因で起きる悲惨な事件が後を絶ちません。これらの問題を解決するためにはどうしたらよいのでしょうか。皆が共に笑って暮らせる社会を築くために、私たちはどうすべきなのでしょう。

街で感じた様々なこと

多くの店や施設には、駐車場に車いすスペースが設けられています。ところが残念なことに、そのスペースに必要がないと思われる車がとまっていることも多く、なかなか駐車できずに長く待たなければならぬことが度々あります。出入り口から離れた一般のスペースでは狭く、乗り降りに不便なことはもちろん、雨の時は傘も差せないので非常に困ってしまいます。駐車場が混んでいる時は、空きスペースがあるついでとめてしまいたくなるのだと思いますが、軽い気持ちでとめてしまったら困る人はいないだろうか、と少し立ち止まって考えてみてもらえたらいいなと思うのです。

そして街での《視線》です。私の電動車いすはスピードがあまり出ず音がゆい思いをす

ることもありますが、まさに私の大切な《足》なのです。しかし小さな子どもにとっては車いすが珍しいのでしよう、不思議そうに立ち止まってじっと見つめてくるのです。それが逆に大人だと、チラチラと見られるということがあります。もちろん悪気はなく単なる好奇心なのでしようが、その視線は私に突き刺さり、私はつい自分で運転することをためらってしまいます。そんな時一緒にいる母はよく「こんにちは」とか、「これすごいでしょう」と話しかけます。すると視線は緩み会話は弾むのですが、私には少し勇気が足りません。無言の視線ではなく、声をかけてくれたらもっと気が楽なのになあと思っています。

またこんな経験をしたこともあります。私がドアを通ろうとしていた時、わずかにできたすき間をすり抜けて出て行ってしまおう人がいました。後ろから突然来られると、電動車いすはすぐに振り向けないし止まれないため、危うくぶつかりそうになったことがあります。またエレベーターを降りようとしていたら走って先に入ってくる人がいたり、よそ見をしながら歩いている人とぶつかりそうになったりしたこともあります。ささいなことのように思われますが、一人一人がほんの少し周りに目を向けることで、誰もがもつと過ごしやすくなるのですが、他にもあるのではないかと、私は感じています。



大学で感じるあたたかさ

私は龍谷大学に入学して以来、たくさんの人にあたたかさをもらいました。初めは環境が大きく変化し本当にやっていけるかという不安でいっぱいでしたが、多くのご配慮をいただき、また優しさに触れ、前向きになることができました。

大学でよく感じるのが、学内を歩いている時です。例えば、エレベーターでは多くの人が私が後から来た場合でも先に乗せてくれたり、降りる時もドアを開けて待っていてくれ

たりします。中には満員で私が乗れない時に、途中で降りてさりげなく場所を譲ってくれた人もいました。なかなかそのような人はいません。もし私が逆の立場だったら…と考えると、本当に驚きました。

クラスの中でもたくさんさんのあたたかさを感じました。私は長時間車いすに座っていることが難しいため講義の後半のみ参加していますが、私が教室に入ってくると多くの先生方が声をかけてくださったり、アイコンタクトをとってくださいます。自然に受け入れてもらえる雰囲気を感じ、本当に嬉しく思っています。またクラスメイトも私が教室を出ようとするとドアを開けてくれたり、私がスペースの都合上少し離れた場所に座っているとデイスカッションがしやすいように近くに移動してくれたり、プリントを代わりに提出してくれたり、いつもあたたかい気持ちをくれます。

想像すること

皆さんにも今まで誰かにされて心があたたかくなった経験や、逆に嫌な気持ちや残念な気持ちになった経験がたくさんあると思います。あたたかい気持ちをもらおうと自分も与えた側も幸せな気持ちになれ優しさの連鎖が広がる一方で、逆の場合だとマイナスの気持ちも周りに広がってしまいます。少しでもあたた

かい気持ちを増やし、皆が笑顔で暮らせるようにするためにはどうしたらよいのでしょうか。私は、少し立ち止まって「想像すること」が大切なのではないかと思っています。自分の行動がどんな影響を及ぼすのだろうか、と考えることで様々なものが見えてくるのだと思います。私たちは、つい自分自身のこととで精いっぱいになりがちですが、ほんの少しだけ周りに目を向ける余裕が持てたら社会は変わるのではないのでしょうか。これは行動だけでなく言葉についても同じです。こんなことを言ったら相手は嫌だろうか、とか、こんなことを言ったらあたら相手は喜ぶかもしれない、と想像することで幸せをもっと広げることができると思います。

今私たちは多様な人々が共に暮らす共生社会を生きています。文化や考え方の異なる人々が共に暮らすというのは簡単なことではないかもしれませんが、しかし、想像することで相手を理解し認め合い、そして思いやりの心を持つことによって、今よりもっとお互いが歩み寄れるのだと思います。「共に生きる」とは、一人一人がお互いを理解し尊重し、認め合っていることなのではないでしょうか。

皆さんも一度考えてみてください。一人一人が大切にされ、誰もが皆笑顔で暮らせる、そんな社会になることを…。

自死問題への取り組みから みえてくるもの

文学部講師 野呂 靖

「死にたい」という
声に向き合って

一昨年、WHO（世界保健機関）より『自殺を予防する―世界の優先課題』（2014）と題された世界の自殺に関するレポートが発行されました。日本語版では95ページにもわたるきわめて詳細なもので、世界的な調査にもとづくWHOのレポートとしては初めての取り組みとなっています。

本書には、注目すべきデータや提言が多く盛り込まれていますが、たとえば「2012年一年間に自ら命を絶った方の数が推計80万4千人にのぼり、平均40秒に一人の方が亡くなっている」という指摘はたいへん衝撃的です。

またレポートは若者の自死についても報告しています。日本の若年層の死因第1位が自

死であることはよく知られていますが、世界的にみても若い世代（15〜29歳）の死因の2番目であり、早急な支援の必要性が指摘されています。

人が自ら命を絶つ、その理由はさまざまであり一概にすることはできません。しかし多くの苦悩や悲しみが今こうしている間にも生じていることに胸がしめつけられます。私は大学で仏教学の研究を行うとともに、10年前より「もう死にたい」と訴える声に耳を傾ける電話相談ボランティアを続けてきました。また、2010年からは京都に自殺対策のためのNPO法人（京都自死・自殺相談センター）を仲間と立ち上げ、自死遺族や僧侶など約50名のスタッフとともに運営に携わっています。

この小稿では、自死の現状と課題について私のわずかな経験を通して気づいたいくつかの問題点を述べてみたいと思います。

数字からみえてくること

報道でも知られるように、2015年の自殺者は2万3971人となり（警察庁）、1998年以降、3万人を超えていた状況からこの18年間で最も減少しました。とはいえ、この数字は、身近なところであれば龍谷大学の学生と教職員すべてを含めた数（約2万人）をはるかに超えています。また、交通事故によって命を失った方は年間約5千人といわれていますから、その6倍にあたります。これだけで本当に大変な数字であることがわかります。

さらに忘れてはならないのが、大切な人を自死によってなくされた方、「ご遺族」の存在です。一人の方が自死をされると、周囲にいる家族や友人、恋人など、その方と生前から深く関わってきた人にきわめて大きな影響を与えます。その数は、一人につき最低でも5人から10人といわれています。したがって、たんに数字でははかることのできない本当に想像できないほどの多くの方が、実はこの自死という死のあり方に直面しているのです。

誰にもいえない「死にたい」

私が仲間と立ち上げた団体では現在、毎週末の夜7時から翌朝5時半まで相談を受け付けており、1日あたり約20件の電話がかかっ

てきます。また電話で話すことが難しい方のために「メール相談」の窓口も開設しており、24時間いつでも受け付けています。年間約2千件以上の相談が寄せられています。その9割が「死にたい」という思いを持った方からです。

東日本大震災がおきた年のことです。ある男性からのお電話をお聞きしていて、大きな気づきを与えることができました。

震災以降、新聞やテレビでは「がんばれ日本」というキャッチフレーズや、「復興」という前向きな言葉ばかりが並んでいる。「命の大切さ」が語られている。



週末深夜の電話相談。どのような相談であつてもまずは無条件・無批判に気持ちを受けとめる

そんなとき、私はいくら毎日生きているのがつらくて、死んで楽になりたいと思っても、それを口に出すのは不謹慎で悪いことのように思えて、誰にもその気持ちを打ち明けることができないんです。

この方は、震災からの復興や、命の大切さを否定的に仰っているわけではありません。しかし、多くの人々が「生きることの素晴らしさ」を語り、「命の大切さ」を説けば説くほど、「生きづらさ」を抱えて生きている自分の存在が、結果的に否定されているように感じるといふことでしょう。もつといえは、私たちが自明のことのように思っている「命の大切さ」という言葉自体が、実はいま苦しんでいる人にとって、ときに苦悩を生み出す原因になっているということなのです。

「苦しい」「悲しい」「もう頑張れない」などのネガティブな言葉は、日本社会のなかでは決して「表」に出してはいけない言葉だとされています。ましてや、「もう死にたい」という気持ちは、周囲の人にはなかなか理解してもらえないものです。私たちは思わず、「そんなこと言わないで、もうちょっと頑張ってみたら」とか、「せっかくの命を大切にしておいてほしい」と言ってしまうがちです。ところが、そうした言葉の前では、自死を訴える声は用意にかき消されてしまうのです。はたして、自死は命を粗末にする行為なのではし

うか。

いのちの大切さとは

実は、「いのちの大切さ」と自死との関係について考える上で興味深い、一つのアンケート結果があります。2008年に、浄土真宗本願寺派（西本願寺）のお坊さん約1万人に、自死に対する認識や活動の実態をアンケートしたのですが、そのなかに「自死は命を粗末にしている行為である」か否かを問う設問がありました（本願寺「自死問題実態調査の分析結果」1～7、浄土真宗本願寺派総合研究所webサイト内で公開）。

興味深いことに、68・7%のお坊さんが「命を粗末にしている」と回答しているのです。私はこのアンケート結果をみたとき、しばし、「うーん」と考えこんでしまいました。

これは、非常に難しい設問だったと思います。たしかに、私たち一人ひとりの命は取り替えるきかないかけがえのないものであり、尊いものであることは間違いありません。そのことは私自身、こうした自死の問題に関わるようになって、とくに実感しています。

しかし、そもそも「命を粗末にする」とはどういうことなのでしょう。か。「本当は生きられるはずの命を『簡単に』捨ててしまっている」「命を軽視している」ということでしょうか。実は私が電話相談を始めてから気づ

いたのは、「自死を考える人は決して自分の命を軽くみているわけではない」ということなのです。

3年前のことです。深夜に1本の電話がかかってきました。若い20代の男性でしたが、第一声が「死ぬ場所を探している」というものでした。電話口からは、雨のなか道路を歩いている足音が聞こえます。消え入るような声で、ぼつりぼつりと話される内容に耳を傾けます。その方は東北地方のある都市に住んでいたのですが、体調を崩したことがきっかけで理不尽にも仕事を解雇され、家族とも離別してしまっただけで、必死に仕事を探したものの、体調を理由に思うように再就職できない。貯金も底をつき、どうすることもできずに、「死に場所を探して」遠く京都までやってこれたのでした。

すぐに数名のスタッフとともに車を飛ばし、その方のもとにかけつけました。すると「何10回となく、ここで死のう、あそこで死のうと思うのですが、直前になると怖くてできないんです」と話はじめました。お話をじっくりお聞きしながら、2時間ばかりたった頃でしょうか、小さな声で「でも…もう一度やりなおせますかね」と仰いました。

もう生きていくことができなと思い、強く決心していたとしても、その心の奥底には「死にたい」という気持ちと同時に「なんと

か生きたい」という思いが隠れていることがある。しかし、一所懸命に「生きる」という道を模索しても、さまざまな要因が重なってしまい、生きていることができない状況に追い込まれてしまったのではないか。私はその男性のお話を聞きながら、自死を考える方は決して自らの命を軽視しているわけではないこと、むしろその逆に、「自らの生と死について何度も何度も考えている―誰よりも―」という事実が気付かされたのです。

「苦」の教義が伝えるもの

「命の大切さ」という誰も反論できない価値の前では、一人ひとりに個別の人生があり、個別の苦悩があるということが後景化されてしまいがちです。しかし、実際にはそうした「大切さ」がいくら頭でわかっていたとしても、自分の力ではどうしようもできない問題に遭遇することがあります。

龍谷大学の「建学の精神」は、浄土真宗の精神、仏教の精神です。そもそも仏教では、人は多くの原因や条件によって左右され、思うままに生きることではできず、本質的に苦悩を抱えた存在であると説いています。「一切皆苦」などの教義は、そうした人間が生きているに伴う逃れることのできない根本的な苦悩について鋭く指摘したものです。

自死という、特別な人が特別なことをし

ていると思われがちですが、決してそうではありません。普段、元氣なときにはどのようなことでも自分の思い通りにコントロールできると思っていますが、現実にはそうはなりません。思いもよらない病気が起こったり、ふとしたことで人間関係が崩れていたりします。そうした、もはや自らの力が及ばない大きな苦悩に直面したとき、心は大きく揺れ動き、普段考えることのない「死」が心に浮かんでくることがあります。

その時、やっとの思いで口に出した「死にたい」という言葉が、「自殺はダメだ」という一般化した「答え」によって否定されてしまうと、「誰にもこの苦しみはわかってもらえない」という深い絶望感とともに、心の奥深くに仕舞いこんだままとなってしまうのです。

「自死はある」という視点

冒頭に引用したWHOのレポートには、次のような重要な指摘がなされています。

自殺とその予防についての研究や知識が増えているにもかかわらず、自殺にまつわるタブーとステイグマは根強く、人々は援助を求めることなく、しばしば取り残されています。(11頁)

自殺についてのステイグマが広がっているため自殺を考えている人々の多くは

誰に話したらよいかわからない。包み隠さず話すことは、自殺を考えている人に自殺関連行動を促すよりはむしろ、他の選択肢や、決断を考え直す時間を与え、自殺を予防する。(65頁)

自死の背景に存在するさまざまなタブーを乗り越えることこそ重要であるというこの指摘は、私たちが自死という課題にどのように向き合うべきかを考える上で多くの示唆を与えているように思います。

私が活動をとおして印象に残っていることの一つに、ある自死遺族の方が「自死はある」と強調されたことがあります。「自死はある」とは、自死という死に方はこの世界には本来存在しない、「あつてはならない死」ではなく、これまでもあり、悲しいことですが現にいまもあるということを意味しています。

生きることの素晴らしさはかり強調される社会のなかで、残念ながら死を選ばざるを得なかった方の存在は「あつてはならない存在」として認識されがちです。しかし、私たちは自死という死から目をそむけ、タブー視するのではなく、「自死はある」という現実を直視するところからはじめなければなりません。「死にたい」「楽になりたい」と感じている人が、その気持ちを人に伝えることは、支援の枠組につながるための大きな一歩です。その一歩を踏み出してもらうためには、自死のタ

ブー視はけつして適切ではない、というのが自死対策のとても重要なポイントなのです。

建学の精神

学生手帳には、「建学の精神」を具体化した言葉として「真実を求め真実に生きる自立の心」という項目があります。一般に「自立」というと、他人の力を借りることなく「一人で生きる」というイメージです。しかし仏教では、私たちはけつして一人で生きているのではなく、数え切れないほどのさまざまな関係性のなかに存在するということがしばしば強調されてきました。浄土真宗の精神では、阿弥陀仏という確かなよりどころに導かれつつ生きる道があることが示されています。すなわち、私を根底から支えてくれる教えや存在に気づかされ、よりどころとして生きる生き方こそ建学の精神で示される「自立」なのです。

現代の社会では、他人に助けを求めたり、迷惑をかけることはけつして褒められた行為とはみなされません。ましてや「死にたい」などと弱音をほくことは恥ずかしいことのように思われています。しかし、そうした考え方は自分が「生きづらい社会」をつくっているのではないかと思われまます。「苦」はさけられないものである以上、「助けて」や「死にたい」など多様な気持ちを認め合い、受けと

京都では毎年、府や市、市民団体連携のシンポジウムが開催されている



めあえる環境づくりが必要ではないでしょうか。本学においてもそうした視点からの取り組みが進められることを期待しています。

遺族の尊厳と生活の 平穏への配慮とは

短期大学部准教授 黒川 雅代子

大切な人を失うということ

毎月第2日曜日の午後、龍谷大学深草キャンパスで遺族会「ミトラ」の案内板を見つけることができます。大切な人を亡くした方たちが集う場、それが「ミトラ」です。「ミトラ」とはサンスクリット語で「友人」という意味だそうです。前学長の若原道昭先生に命名していただきました。大切な人を亡くした方が



集い、友人として支えあうことができればとの願いから、ミトラと名付けました。

遺族が体験する心身の反応は様々ですが、一般的に食欲不振や眠れなくなる、悲しみ、怒り、罪悪感、疲労感等があります。また家に引きこもってしまう人や、逆に考える時間もないくらい予定を入れて動き回る方もいらっしゃいます。

人は、大切な人を失うことで自尊心が大きく揺らぎ、自責の念に苛まれることがあります。時には自分のことを生きている価値がないとまで考えてしまう方もおられます。

グロウルマンは、大切な人を失うということについて、このような言葉で説明しています。

親を失うことは、自分の過去を失うこと
配偶者を失うことは、自分の現在を失うこ

と
子どもを失うことは、自分の未来を失うこと

友人を失うことは、自分の人生の一部を失うこと

そんな時「あなたは決してひとりではない。あなたには仲間がいる」という同じ体験者からの有形無形のメッセージは、死別体験をもつ人に生きていくための力を与えてくれるものであると考えています。

子どもを亡くされたお母さんが私に、「子どもを亡くすことは人生のすべてを失うこと、子どもを亡くしてから10年、自分自身の人生にずっと価値を見出すことが出来ない」と語られました。

大切な人との死別は、自分の描いていた人生設計や夢・希望が根本から崩れてしまうような出来事です。崩れてしまった人生設計を、現実的な形に変えてもう一度作りなおしていくことが必要となります。もしかしたら、それは遺族にとっては途方もない大きなハードルと感じられることかもしれません。

私たちは人生の中で小さな喪失体験を繰り返して大人になっていきます。記憶にある最初の喪失体験は、大切にしていたおもちゃが壊れてしまった体験かもしれません。小学校のクラス替えて仲の良かった友だちと離れてし

まったこと、友だちに新しい親友が出来たと、失恋など、私たちは喪失体験を繰り返し、その中から失ってしまったものとはまた異なった価値を見つけ、折り合いをつけてきたのです。しかし大切な人との別れは、小さな喪失体験の中から培ってきた知恵や工夫だけでは、太刀打ちできないことかもしれません。そんな時、同じ体験者が死別の喪失にどのように向き合ってきたのか、どのように折り合いをつけようとしているのか、その体験を共有することは、大きな知恵と勇気になります。そんな場所が遺族会「ミトラ」なのです。生命の歴史は、誕生と死の両者が隣り合わせになって繰り返されてきました。先達が死とどう向き合って生きてきたのか、多くのことを教えてくれるはずです。

体験者の共通性と個性

ミトラで同じ体験者と出会い、体験の共有をすることは、これからの生きる路を照らしてくれる一筋の灯りになるかもしれません。しかし同じ体験者といっても、人それぞれです。

わたしたちは何か困難にぶつかったとき、どのように対処していくのか、その方法には個人差があります。生まれ育った環境や亡くなった人との関係性、人生設計をどの程度描き直す必要があるのかなどによって、喪失に

対する受け止め方は変わってくるでしょう。同じ遺族であっても、これからの生き方をどのように考えるのか、それは参加者一人一人が個々に答えを出していくものなのです。そのため「ミトラ」では、お互いの体験や感じ方を尊重し、一方的なアドバイスはしないようにしています。お互いを尊重し合いながら、自立した関係性の中で、ひとりではないと思える空間を作れたらと思っています。

自死者と自死遺族の名誉と生活の平穩

妻を自死で亡くされた男性が「人は嫌なことがあれば死んでしまいたいと思う。でも本当に死んでしまふ人と思いとどまる人とは、そこに大きな隔たりがある。そこを飛び越えてしまふ何かを知りたい。妻がなぜ隔たりを飛び越えてしまったのかを知りたくて、あらゆる宗教の本を読んでみた。でも答えはまだわからずにいる」と話されました。

自死の場合、死に至った直接の原因はわからないことも多くあります。しかし、亡くなられた方が大切な人であればあるほど、遺された人は、なぜ気付かなかったのかと後悔や罪悪感に苛まれてしまいます。

彼女はまだ小学生でした。思い当たるのは友だちとおもちゃの貸し借りによるトラブルがあったということです。遺書も何も残され

ていなかったもので、本当のところは不明です。ご両親は、「おもちゃよりもずっとずっとあなたの命の方が大切なよ」と、何度も亡くなった少女に伝えたかったことでしょう。「なぜひとりて抱え込んでしまっていたの、なぜそこまで思いつめていたことに気付かなかったの」と責める日々だったそうです。それだけでなく十分辛いことなのですが、周囲の人からの無責任なアドバイス、そして「親不孝だ」と少女の尊厳を傷つけるような言葉が周囲から両親に発せられたと聴きます。自死の場合、特にそういった周囲からの無責任な言葉に傷つけられることが多いように思います。自死に対する偏見や無理解が遺された人をさらに苦しめているのです。

私の実施したインタビュー調査で、「自死で亡くなったことを極力周囲に話さないようにしている」「自死で亡くなったことについての自責の念を強く抱いている」と遺族は語っておられました。周囲の無理解から自分や家族を守るためには、極力周囲に話さないという選択肢になるかもしれません。

20歳の息子を自死で亡くしたご両親も、周囲からの無理解な言葉に傷ついたと話されました。「いつまで悲しんでいるのか、20歳まで生きたからいいのではないか」という言葉です。ご両親は、「周囲の人は慰めようとしてかえって傷つけるような言葉を投げかけ

る」と話しておられました。

自殺対策基本法(平成18年法律第85号)では、名誉及び生活の平穩への配慮として第七条に「自殺対策の実施に当たっては、自殺者及び自殺未遂者並びにそれらの者の親族等の名誉及び生活の平穩に十分配慮し、いやくもこれらを不当に侵害することのないようにしなければならぬ」と書かれています。本当に第七条の意味を理解している人がどの程度いるのでしょうか。ここで考えておかなければならないことは、遺族が周囲の人に傷つけられたと話している内容は、多くの場合、その人を故意に傷つけようとして発せられたものではなく、親しい人から投げかけられた言葉の場合が多いということです。

想像力と感受性を養う

多くの遺族は、「体験してみてもわかった。今までは自分も無理解な言葉を発していたかもしれない」と語られます。私たちは、過去の自分の経験の範囲内でいろいろなことを考え、発言し、行動に移しているのかもしれない。しかし、私たちが経験出来ることは、広い世界から見たらほんの些細なものではないかありません。苦境の中にある人の役に立つためには、体験していないことに対する想像力や感受性を身につける必要があります。そして想像力と感受性に自信がないからと、

見て見ぬ振りをすることは決して良いことではないはずです。社会全体が亡くなられた人と遺された方たちの尊厳を大切にすること、そして遺された人の生活の平穩とは何かについて考えることが出来たら、親しい人から傷つけられる経験をする遺族は少なくなるはず

環状島から考えるそれぞれの人を認め合い生きやすくなる社会とは

宮地尚子さんは著書『環状島』トラウマの地政学』の中で、当事者とその周囲にいる人たちの関係性について、環状島という地形図を使って説明しています。環状島とは広島や長崎の原爆被害の爆心地を中心とした同心円の地形のイメージです。ドーナツ形の島の内と外は海で、大まかに分けると当事者は〈尾根〉の内側、当事者以外の人は外側と説明しています。〈内海〉は死者や犠牲者の沈んだ領域、内斜面の陸地は言葉を発することが出来る人たち、〈外海〉は無関心な人、傍観者で支援者や関心を持つている人は外斜面に位置し、コミットメントの程度が強いほど〈尾根〉に近くなると説明しています。そして支援のもつ意義の一つは、〈内海〉や〈波打ち際〉から声をあげられない人を〈陸地〉に引き揚げることにあります。また〈内海〉や〈外海〉の〈水位〉は社会のあり方によっ

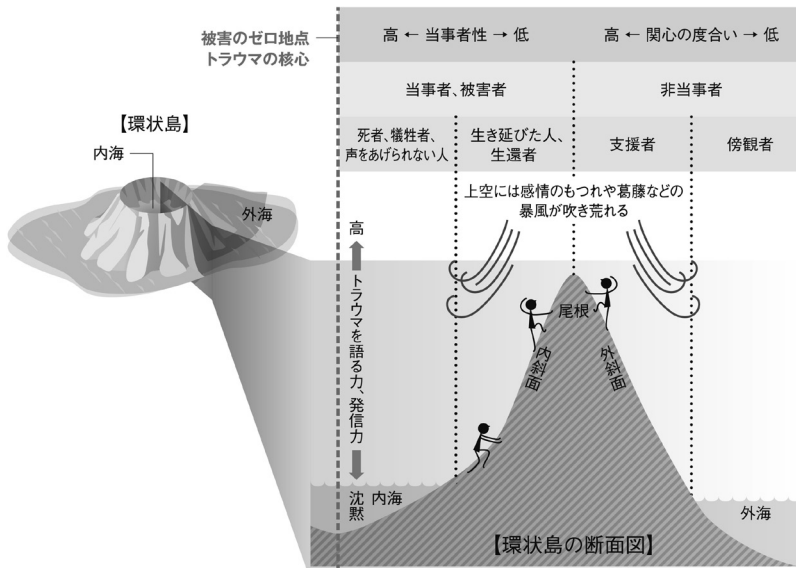
て大きく変わり、〈水位〉が下がれば〈波打ち際〉が〈陸地〉となり、その問題について語ることのできる者が増えること、〈水位〉が上がれば、時には島全体が海に吞まれ、その問題は忘却に追いやられてしまうと指摘しています。

犯罪被害者遺族の原田正治さんは著書『弟を殺した彼と、僕』の中で「僕も僕たち家族も、大勢の人が平穩に暮らしている崖の上の平らな土地にもう一度のほりたい、そう思っていることに気がついたのです。ところが、崖の上にいる人たちは、誰一人として『おい、ひきあげてやるぞー』とは言ってくれません。代わりに『おまえのいる崖の下に、こいつらも落としてやるからな』。それで気がすむだろう」被害者と加害者をともに崖の下に放り出して、崖の上では、何もなかったように、平和な時が流れているのです。自分で這い上がらなければ、僕らは崖の上にはもどけません。しかし傷は負ったままなのです。傷を隠して自力で這い上がることはなんと苦痛でしょう。怒りで地団太を踏んでいると、さらに下の奈落の底に落ちていくかもしれないのです」と語っておられます。私たちは本当に相手の話を聴こうとしているのか、そして自分勝手な価値基準で決めつけていないのか、環状島の関係性や原田さんの語りは、大切なことを教えてくれていると考えます。

まずは、傍観者ではなく、環状島の外斜面に
に続けることです。そして、波打ち際や内
斜面にいる人の言葉にきちんと耳を傾けてい
くことです。社会の関心が乏しくなれば、島
全体が海に呑みこまれ、内海にいる亡くなら
れた人や内斜面にいる傷ついた遺族の尊厳は
守られなくなってしまいます。

遺族の名誉及び生活の平穩への 配慮とは

私は遺族の会の運営に携わって21年目にな
ります。その中で感じていることは、多くの
遺族が、周囲の人の無理解な発言に傷つけら
れているということです。特に自死遺族の方



図の出典：『震災トラウマと復興ストレス』と『環状島』に所収の図に一部手を加えました。

公益財団法人 東京都人権啓発センター
TOKYO人権 第51号（平成23年9月30日発行）
http://www.tokyo-jinken.or.jp/jyoho/51/img/zu_big.gif

は、内海の中で沈黙してしまっている人も多
いのではないかと危惧します。環状島の尾根
の近くは暴風が吹き荒れています。せつかく
尾根近くに上がってきても周囲の無理解によ
ってまた内海や波打ち際に落とされること
がないように、死者や遺族の尊厳を守るため
はどうしたらいいのかについて、私たちは考
え、想像力と感受性を養っていききたいもの
です。

文献

- Grollman Earl A. (1981) What Helped Me When
My Loved One Died, Beacon Press.
原田正治 (2004) 『弟を殺した彼と、僕』 株式会
社ポプラ社
宮地尚子 (2007) 『環状島＝トラウマの地政学』 み
すず書房
宮地尚子 (2011) 『震災トラウマと復興ストレス』
岩波ブックレット
公益財団法人 東京都人権啓発センター (2011.9.30.)
「特集 震災と人権 復興に伴うストレスを知り、息
の長い支援活動につなげる」『TOKYO人権』第51号
[http://www.tokyo-jinken.or.jp/jyoho/51/jyoho51_](http://www.tokyo-jinken.or.jp/jyoho/51/jyoho51_tokushu.htm)
[tokushu.htm](http://www.tokyo-jinken.or.jp/jyoho/51/jyoho51_tokushu.htm)

※ここで紹介した遺族の語りは、遺族会「ミトラ」
の参加者のものではありません。また「ミトラ」は、
死別の理由を限定しておりませんので、病气、事故、
自死等さまざまな理由で最愛の人を亡くした体験を
もつ方が来られています。

今号の特集では、セクシユアル・マイノリティを主題に取りあげました。性の表現への偏見や誤解ゆえに、社会の片隅に追いやられ、抑圧され排除されてきた人たちは少なくありません。ありのままの自己を隠し偽装せざるをえないことは生きることを否定されることに他なりません。国連では、性の表現を性的指向（セクシユアル・オリエンテーション）と称しています。異性との性器による性交を特定の人と慎ましやかに行う性的指向^①のみをノーマルとすると、同性愛や両性愛（レズ、ゲイ、バイセクシユアル）はアブノーマルとなります。あるいは性器以外のセックスやフェティシズムの傾向まで異常とされ病名が付くかもしれません。ただし、これらの指向は、濃淡が連続体的（スペクトラム）であり、ノーマルとする規範の強弱と範囲の広狭で、抑圧される人の多寡が決まってきます。

性的指向のほかに、性自認が身体的状態と対応しない^②状態の人がいます。トランスジェンダー（トランス・パーソン）と呼ばれています。性についてはまず、生物学的なバリエーションがあります。遺伝子ではXXとXY以外に、この間の連続的な多様性があることが分かってきました。これに胎児期の性ホルモン・シャワーの組み合わせの影響で、XXなのに男性脳、XYなのに女性脳という人が出現します。男性脳と女性脳の間にも無限の多様性があります。

第2に、性については、生育歴上のバリエーションが影響を及ぼします。メラニー・クラインがフロイトの理論を踏まえ「対象関係論」として考察していますが、すべてのものを性的対象とする「多形倒錯」状態にある幼児が、それを克服して「器器性愛への統合」を果たすためには、母親との関係が重要だとするのです。これはあくまで仮説で

■編集を終えて

豊かな性表現を

人権問題研究委員長 加藤 博 史

す。ただ、幼少期に性的悪戯や嘲笑・暴力を受けるとトラウマになり、性的指向に影響を与えることは確かでしょう。

第3に、性については、社会文化的バリエーションが影響を及ぼします。信長や家光に見られるように、当時、男性同性愛は公認でした。今日、女装コスプレや草食系セックスレスは大きく許容されているような気がします。

そして確実に、多様性を求める社会の動向は促進されているように思われます。2008年12月の国連総会で、「性的指向と性自認に基づく差別の撤廃と人権保護の促進を求める声明」に日本も同意しました。

神話のアメノウズメに象徴されるように、性はユーモラスで楽しい全体的な（ホリスティック）コミュニケーションでした。私たちはマスメディアに洗脳されて、画一した性表現に縛られているのでしょうか。メディアによって特定の性イメージを押し付けられながら正常だと思いついている人たちがこそ、マイノリティなのかも知れません。

五木寛之は、百のラプスタイルを認めつつ、ポリネシアの人たちの「抱擁と愛撫をたつぷり楽しみ、お互いの命の声を聞きあう性愛」を推奨しています。親鸞聖人は性に悩みながら、性から逃げずに向きあい、妻帯しました。夫妻お互いが敬愛し濃やかにいたわりあう手紙が残されています。性はケアであり、深い愛情表現とひとつになるとき豊かさを増します。

性の商品化や暴力を伴う性は厳しく克服されねばなりません。そして、性的に抑圧されている人たちの人権と尊厳を回復し、多様性を認めあい、性の楽しさを豊かに表現するためのヒントを、今号の特集から汲み取ってもらえたら幸いです。



「白色白光」

「白色白光」という言葉は『仏説阿彌陀經』に「池中蓮華 大如車輪 青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光 微妙香潔」とあり、本紙の表題にふさわしいということで命名しました。これを口語訳しますと、次のようになります。

池の中に咲く蓮の花は、車輪の如く大きい。例えば青い色の花は、青く光り輝いており、黄色い花は黄色く光っている。赤い色の花は、赤く輝いて咲き匂い、白い色の花は、真っ白に輝いて咲いている。その各々の花は、微妙であり、妙な色合いであり、その香りたるや、芳しく清らかである。

世の中には、青い色の花として輝く人もあるでしょうし、あるいは白い色で輝く人もあるでしょう。このように、私たち一人一人は、それぞれの母の胎内から生まれ、尊い生命を恵まれた、かけがえない存在なのです。

「白色白光」には、お互いがお互いを尊重しあいながら、自分だけにしか出せない美しい輝きでもって咲き匂って欲しいという願いが込められています。

「白色白光」第18号

2016年3月1日発行

編集 龍谷大学人権学習誌編集委員会

(入澤 崇／長上深雪／加藤博史／佐々木大悟／妻木進吾／長野了法)

発行 龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

☎075(642)1111(代)



生きてゆくことは

とてもむずかしい

そう

とてもむずかしい

生きてゆくことはすばらしい

とてもむずかしい

考えなくてはならない

深く、自分の中に入って 考えなくちゃならない

とてもむずかしい

生きてゆくことは

すばらしい

（『山田かまちのノート（上）』ちくま文庫、二七六頁）より

山田かまち（一九六〇～一九七七）

群馬県高崎市出身。一七歳で夭折する。死後、彼のノートに書かれた絵や詩が出版された。『悩みはイバラのようにふりそそぐ』（筑摩書房）、『17歳のポケット』（集英社）などがある。彼の詩には青年時代の自身の悩みや喜びが表現されており、時代をこえて共感を呼ぶものとなっている。本作品は彼の浪人時代にあたる一九七六年のものである。